後農雜話

弐

1 5
1597
2

門 15
號 1597
卷 2

冊 五
號 三乳ほ
函 三

駿其公雜話卷二目錄

義集

天運の稽古
天人相勝
鈴木某う歌
不收不求
秘事々睫
仁ハ心のいのち
浩然乃氣
民々玉巷の天
善惡の報
夏代浮世
朝うかの花一時
春秋乃おそれ
佛よなるやう
義ハ心代きる
敬の工夫
富士のもとゝ

藏書

天下の寶　風俗ハ政の田比

駿甚雜話巻二

武運の稽古

わるゐ時ハ幾人ゝ武藝ハ此場よりゆるさゝ小筒の業ハ事ゝ例の文談ゝ及ぶ所ハ前ゝ武藝ハ各の家業とゝ心ハ常ゝ稽古あるべきなり心ハ武藝と武運ハ一つゝきゝ事とおもひ給ふ武運ハ武藝よりも武運ハ二ときゝるとおもひ給ふ武藝ハいつゝ武藝ゝ達ゝ為ゝ人なりとゝ武運ハ武藝ゝ達ゝ為ゝ人なりとゝ武運ハ武藝ゝ達ゝ為ゝ人なりとゝ武運ハ

所なれども、名君賢臣の稽古わすれず、武運の稽古一筋うしなはず、
武藝は稽古にてこそあれ、この所は同作にて、武運の稽
古よりおこり、藝術の所より起れば、武運の稽古はなくして、藝術と
そと治るものなり。其中にも、第一の作るよりも、武運
の稽古とは、事こまやかにして、むしろ人力の及ばざる
ものなれば、武運とは、世法にも、稽古おろそかなるべ
し。況や藝術にせよ、きとくは、第一に振ひ、武運は藝術
に比べ、なほざりにすべからず。武運は、第一、是非、運とは、
よろづ、おろそかなるべし。天よりおこるべき、世法にも運
は天よりあたへたまふ。運をは天より授かるべし。天の

人をば、はたらかせ、天の時をば、人の力にて、悪しきをば行
はず、悪しきをば、行はず、善をのみ、天は好悪を楽しみ、天は仁
をのみ、天は不仁を悪む。信をもって、不信を悪む。其人、其事、
よ、天地の万物を生ずる心なり。故に、天地の万物を、今、人
間をば、生じ、てやむものは、秋の肅殺の氣行なはるるなり。果
して、肅殺するは、悪を、生氣を、閉じて根へ帰せしめ、春を待つ、文
殺生せんとなり。易は、生々之謂易といへり。天地之大徳曰生といへる
は、此事なり。天よりあたへ、地を生ずるは、人を在て、人を生ずる
なり。名君、賢臣、武運、稽古、天の仁、なほざりにすべからず。
つつしまん。終なり。又、仁をなむるは、日月星辰の

行度萬古と作くも一日のごし日月の食なる是を遥に遥なる八
空のかなる事をもつくゝ中く推歩するゝ分秒をもとゝ
さんぬるを遥なるたゝのなるまわれ爲さ中天下九丘信と
いつくゝ佛きハ人をかの事無ゝ考はらくさゝそ爲仁
ゝ信ゝ爲ゝ和ゝ是ハ。あ所ゝ天心ゝ叶ゝ也。天人ゝ和なる
そ。なくゝ擁護なゝ爲ゝ是きさゝとて考はらくゝ仁と行ゝし
佛ゝ信とちゝくゝ其驗わ爲ゝきとゝ月わ爲ゝ是ハ平生に
わゝ爲ゝまなゝ常ゝ仁と好ゝ人とそゝなくゝ爲ゝ仁ゝ爲ゝ
考ゝ人と欺うそゝ考ゝ家月を欺ゝ月。是誠天ゝ知ゝ
そゝこゝさゝふ見ゝ冥助ゝわゝなゝ。戰場ゝ中ゝ佛ゝ

禍機ゝ觸ゝ矢石ゝ中ゝ爲ゝ。前ゝ。我運の盛衰ゝ
とゝ中ゝ。そゝとゝすゝくゝ知ゝ。老人の僻言と聞ゝ給ゝ
ゝ爲ゝ。なゝ。ゝ。きハ。世俗の有ゝ法ゝ爲ゝ。ゝ利ゝて
人ゝ。ゝ。ゝ。偽ゝ。智ゝ情ゝ詐ゝ飾ゝ。自ゝ。ゝ。ゝ。世ゝ。
ゝ。き計ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。天ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
運長ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
或ハ子孫ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

らせ家滅びて跡方もなく成行きわたる者多くなれ
行ふ事はなはだ多し　晩年を保さらこ
とはく人生命八苦戦運の稽古なきがゆえなり
とうとうるまで何ぞ稽古なるべし　行儒厭勝の力なく戦運
とうるもとなるべし　孔子も獲罪於
天無所禱也とこれの給へり　元神ましまし佛ましまし
羅尼やうのものを信ずる婦女なるものすべし　うせん大夫なる
者の有益きまま中にわ雑きを絶ちよ近世士大夫なるべ上たる民
の所教なるべ　とうとうく惑ハさらるすなわち　さきハ左道の民間よ
りり行ひたきもの法遷を衛毛詩の瞻烏爰止于誰

之屋とい哀れ吟ぜく　慨嘆よおろかしく　いかるものよりわるけん

善悪は報

善はよくわるくわるく　在中よりく衛よりく戦運の稽古と
ゆきまわる雑き事なるべく感服し給ふ　今ようく世稽古なれ
ばくなるべきさわく世ハ仁わるく伝わるべよ禍わるもわる不
仁不信なる人よ福わるもわる　顔回ハ大賢なるとも貧窮なるく
夫し盗跖ハ大盗なるとも富厚わるべ　衛の人多く戦運
の稽古もなるべく　ゆえ　紂ハ暴虐なるべ　ゆえ
ゆの人衛とき若ものハ禍わる　悪をすとハ禍わるハ　乃
なわく必定のものなるべ　とき幸わるハ　吉の仕合わる

不定なるものなり。聖人も多く正理を法作なれば、常に
ものをいふに法作なるべきものなれば、人病なく長命なるべんと、おもへ
ども常に酒色をいましめ、常に病なく長生するものは、元来の気まわりと身
せんやいかんは、職業を慎まずしてよく生をするものなり。強ちよ
き生をしてもよく生をわるくしても長命なる
人もあり。さまざまにとく生をしても益なし。生世況に害
なりとはいつまでもよく生をもつくるべき。不幸わるく生をするものは、
生をしてもよく生をしても幸わるく生をするものは、さまざまにとくよく
奉公をつくしても益なし。生をしてもよく生をしても害なり。とかくに
養生をつくしても益なしといひつくるは、酒色を恣にせば、

やがて病死をまねくべし。奉公をつくしても益なしといひつくるは、
職業を慎まずして、黙罰せらるべし。生をしてもよく生をしても
の道奉公をつくしても益なしとなるの道なれば、元来不易の理といひつべし。
各よく考へて見給へ。なるべくわきまへ、よく覚悟をさるべ
き。法作なれば、道理のおのづから定まるべきなり。法作なれば
わかりやすく定まらぬ。よきもあり法作なれば、道理のおのづから定まる
方よきは、法作なれば、わかりやすく極まるものなれば、
こうくわい後悔なすべし。もしまた、生をしてもよく生をしても
よくなるものなれば、生をしてもよくしてもよくなるものなれば、
を嗜べし。さまざまに病苦禍悪やいかんとて法作なるべし。

聖人は教も君子は道のおのおのきそれぞれ其上吉凶禍福
天はまのあたりそなはるものなれば人の為業つゝ
なるべし福を得んとて善をなすべし禍をおそれて惡をさるべし
おのづから孔孟の人と教へ給へる福善禍淫の
道理に及ぶ事は商書にもあり天道は福善禍淫とは人たる
者たるべき為にあらず惡須らく慎むべし
中庸に知者は惑はず仁者は憂ひなしと道理の至極
便なりとやうの中庸に同日の論にあらず釈氏の方
天人相勝

翁かつて問ひたまへる人衆勝天天定勝人の説は伍子胥吳
王闔閭をすすめて楚國を攻入父兄の仇なるまゝとして舊君平王
の墓をあばきて尸を戮すべし伍子胥の同友申包胥承ては
ならずとて二のあるべきの中にて人をして伍子胥に告げ
今の名言といへども天は必人よりして勢盛なるまゝ人力をもて
ともに考へらるべき天に勝ものなるべし
ともに天のいまだ定まらざる内のまゝなるべし天定まりては人
勝ものといふべし但天も悠久なる自然なる物なるまゝ人の
紛乱なるもの急に其験を見ざるべし強ひて人ちいさき眼
をもて天道を窺ふべからず月日のうつるまゝにとなく若惡に報なき
ものと思ふべし善をしても報なく小人を悪とし

てし給ふ事なれども、善惡ともに天定まりて人は
勝手なるものなれば、そもそも顏回の夭盜跖の壽
いまだ定まらざるなり。其後天の定まらざるは、顏回は一簞の
食一瓢の飲陋巷に窮居せしのみ。其名人なる日月と倶に亡
て、文載朽ちずして肉はまだ寒さうに名を留めず。盜跖は聚徒
の人天下に横行せ
なり。惡く遺臭百世にて稱せられども、いかんぞ善を見て
後に天の顏回に報する事果して薄く、盜跖に報する
事果して厚からざるや。顏回盜跖の善惡乃報
報おそきは稀なり。其外世俗を思ふに善惡の報端的なる

もあり。又善惡ともにおそきもあれども、其身に及ぶは
て後國家賊吏多く前後罪なきもあり。
もあり。おそく善くとあり。又半ばは一生のうちに死後
善くもあり。い善く善くは邪縣の租稅金穀
の出納年を積み限りなく稠畳する故その交互紛糾の中金
銀の出入多くひまなくも大なるは善き程に小人を利欲に
さとき者のなかにはそれぞれよき樣今と人に多く稽を廻したに
初めこそ官財を私して妻子をさやうに奢侈をきはめ
ともその跡乃ち絶ぬ程に怪ぶべし。善惡を計るに自ら計
其内おそく善く罪に行ふ事あるべきなれども其人の

ゑんをうれひと。及く已が智を自慢して。いさゝか懲戒なく
人をすて。ときと才芸をとりて。ぢう多のえんをやわる。一
旦ちうこうさるゝ其場の人〳〵。紀同くおろかにすて。分釐も動
定を漏らふことなく。其人が智も計も施をやまなく。その其利忽わ
殺ごとくさきに人をなりくのうとうくしも事に落ることの
寡ふく。彼もそも終は免らぐハ世に出ん国家の上ぐ乃ちよ
大きなる石岩ハかゝのごとく中に実虚俄ハ出ん出きそのいと
もや天を四海国土を偏覆し。光億万ともなき人をして文くいく
莫大の世界なり。おのゝ人のもとに出ん。若とも悪とも限も
なく入れ乱ハ若逸北報いうくく急に極りくきに於茶後尚おと

ゝ。治定せぬ事に成やうに見ゆ。小人の険岨なる事
とゝもとあやもわやもひとうくうくに出ん天と終は勢定
の極する時わゝ。元を天定するとゝ出ん。ちくゝ天の駆
明を。天下の名義の人とゝ及ん。若逸北報報
事大小すくもあるゝ出ん。むゝ出ん伝
ゝやまゝもよ世の英雄豪傑ゝ人ハ己が武勇智謀を誇
て。天のよい定ゝさら戦見ゝ。天を人力をもく自わり
なるゝとゝ。おゝ乱ゝ。猛威を逞し。勢力を恣にして。一旦
ハ志を得るゝ仕ゝとゝ。狂ゝ天定ゝ。ねゝ出ん勢
天罰ゝわゝ。ゝ家滅ゝ。古今歴ゝ。ゝて。そ

の為ありてすなはち仏さまを尺八として天を勝て禍のもとを
去るべし小人を眼前の利を見て遠く後患のよろこびを
若子を赤貧の官を置く恐るべきを懼る詩に今ら
すれば畏天之威于時保之とは滿ては母を知ずして保
はくき事なるべし

愛欲の世

あるべきは惑溺の教を信ずるなり
あるべからざる人の命をおくるの人は必ずひとり其術をまなびて儒
道のやうなる事をとなへ行ふなるべし
行ふ今此儒者を見ればなるべし貧有の相は泥くして物を

名利をうばらんとの狂は一生道を知ずして仏者は世
を如夢如幻と見るなれば異端なりとせず仏性をさとり年老た
地を知る人も多し吉凶利害の縁のとく等を予達と門に接るを
見るに浮世の有様すべて夢なり行るいろいろをよんとうもしき
一句に夢と見破るべしこれ道なりとしたがひ色々とうの術風で
なるものしのゆらるべし其いとまなきなるもわらはれ者の高明の
士の儒を逃きく佛に帰するは其なるべしそれ人きく
鄙しきものなり行ふ作の事あり或人義に依るべきなる家に
富饗の役きあるべし其座にて衆客多ともまいる
者に其中に一人あるべし酒食に飽にてのちさるべし

うきまゝにわすれ果ての腹を抱く病人も路ゆく乞児の飢を食をもとむるなかれ。おのれ彼の身をつのらば、かのおろかなるこゝろ、とゝ、とゝ、とゝ、今儒者世をまどきらひ利を、とゝ、とゝ、頭陀の教をこゝろ、とゝ、とゝ、人の酒食を飽くに乞児をこゝろ、とゝ、とゝ、仏の名教中を楽しむこゝろをこゝろ、とゝ、とゝ、天下を真と妄とわけ、天地をもあるに真と人物をわけるに妄とわけ、天地開きそめしより、三綱五常のたゝりて、古も今もいつるはさまに天道の常なるを、真とする地なり。いくさを愛とし、彼となるべし。仏世の人、多くは富貴利達を謀り、毀誉得喪を拘へ、一生東西に奔走して日夜徒に

る程に、忽に住忽に滅。圖陸さくさくのうつるがごとくにて、ふたゝび只皆人欲のうつるものなるに、義をもつて彼とも、孔子も正義の高貴と見給へども、浮雲なるうなきのみやうにもとゝ絶えとなるべし。釈氏三世の仮世なれば、行きつゝすくひ世と愛と見彼とうつくし。真と妄とをうつして、三綱五常をうつくしみ、塵芥のごとくにうつくしみ、用ひうつくし物と見て、耳わすれうつくし物をきくに、ふるうまのごとく、用事ふまのごとくにうつくし。終に目をはなれ、耳をきくせて聲聾となるとも、はつきりと見きくの根にて、快しとするこゝろ、志陸をやぶりて、天地を文くし、自然を見へつるに、無為なるよ

てこそこの虚霊なる本を貴とすれば今現と本とを二障と
なし二途五常をさくすれば一つにわたらぬものとなりぬ
るなり本来心とすべき実やくこの神識の霊覚なる地をさらへて
本来真如とするはうわなれんとくはんもの火の光明なるなり
火を物を照してこそ火とはいへ山海なりとてはあり龍燈
山燈なりとて世よりこの火のとこしなるものを照すものなり
く沈める光のこれなるべく星遠く宇宙よりは自在なる光なり
神火とてそこなうこと是さること八仏法世の行なきてよりて後五倫五
常とてわるきてこそ多くなりぬ動作する人なり人事物理真
なるこそして多くなりぬ霊覚なるこれなり自本ハ

推古よりこの方漢の明帝よりこれ以来のごとき
のこれなり仏法なりとて仏性なりとせよ事実なりとせよ
宇宙の妖魔といふべし当るべきやとも仏法なりとも
なる事なり作るべきも果きもあるべきも傾うねるべきやは成ハ者ハ
ものとて父子なり背くべき家道世なるべしとせよ
きこれなりやこれ真の道なり人なりとて成ぬ
やとあやまりきはまるなり男ひげなる者の貫頭なるあるもの
長太郎はたくしとくに箱を踏なり

鈴木某の歌

さてこれなりとむこれ法本のなりとなりなんなりなり

父一門ノ教ヲ受ケ後世ニ其ノ学ハ儒ト号シ遠ノ大義
ヲ知ラル人ト聞テ其人ノ学ハ別ノ世ニ命ノ学ニ変ル其ノ変ル
ヲ知ラズ和ヲ同志ノ人ヨリ在ル所ヨリ其ノ志ヲ
ヨク学ンデ其ノ志ヲ行ハズ但ノ学ンデ知ルヲヤト問ヒ
ヲ遠ヨリ学ブ者ヲ遠ヨリ学ブ者ヲ以テ知ル知ラズ
ヲ知ルトハヨムカノ学ヲ以テ知ル知ラズ知ル人ノ術ヲ
ハ知ラズ学ブヲヤ知ラズ知ル人ノ術ヲ知ラズ
ヲ学ブヲヤ知ラズ知ル人ノ術ヲ知ラズ知ル人ノ術ヲ

きて、何ぞこの俤の光を去るとて、銘々より身よりは、何のとて外物より極さまき実はよりあるべきの起るもそれ荒るもそれ動もそれ
動もそれ移ろ色移ろ色は何ぞ世間比自然の理なり。夷あるもそれ険あるもそれ生するもそれ死するもそれ。古山鶴福皆是なり。造次あるもそれ顛沛
ともそれおくをそれとなれを見わ去るとは、なりかくいばとく。
翁も、ゆくあるよりも移、寡よ去る人よりあり。玲本某もあるよ及ぶ
ど自ら、ときとて、希有なることなり。又は去りてやと、八月九日なり。

銘々の花一時

十四日松永某とて玲本氏の道を友あり。其人銘々の歌
とくうるアーニ自ら、よりあれ称者。又も玲本氏のよりて者。

とうく去人の内ゆくあるもしし。
あさがほの花ときもゆとせ郷ふ行よりそらぬよりてもるる。
山歌もそ味帰ってきやうるあ月くれ待る。青ゆゆわさうそよめる
歌あ月後とも。たうる銘々のなのわくなる幸をひく秋のあ
きとそく世のそのなる我去らすると知向とする外に人を白居
易う松樹千年終を朽。槿花一日自為栄とて人待ぞ去自の頭
詠ゆとして風雅とすることもあるく栄枯を知るあり。
彭殤を齊〜するそそく。俗耳ハ高きあるしよきこゆまとも、と
淺きそのなるあるを。光陰ハ瞿曇の誕を引。荘周の唖を
なのもるよ迷ふ。今松永氏のなるそらぬとくるハ人をあく

ハすの間くゝ若くゝ、あるひハ行ゐ、翁ハ親よ道を聞くゝ今よ死す
も可なりとゝ人るゝとゝ事ハ思ひ給ひ、親よ嘆くゝ日の暮を待くゝき
ゆゑハ親の身の天よ恋る性なるを世よハあとを弥るゝ様ゝ思ふよ
親ちゝ様ゝ生を惜くゝ、さゝの已を忘れ子を羨の心ゝ親よ
親ちよゝと嘆くゝ見ずよ嘆くゝ文惜くゝ性分をたゝして捨るゝ
親の見る涙なきゝ、ゝゝ様ゝ子ハ捨ゝ同ゝ事ハ
わさゝうのちゝ様ゝ二人ゝ子ハ捨ゝ人ゝ捨ゝ
子を世ゝ様ゝわさゝうをの今よ一日ハ親ゝ各己ゝ性分を変ゝ
親ゝ親ゝを捨ゝ親ゝを世ゝ子ゝ人ゝ様ゝわさゝうゝ子ゝ一日ゝ
と思ふゝ親ゝ人ゝ様ゝ様ゝ親ゝ親ゝ様ゝ

おとのゝ妻情の地ゝ様ゝ人ゝ有ゝ様ゝ様ゝ物ゝ霊ゝ
ハゝ人ゝ様ゝ私智ゝ妨ゝ様ゝ、ゝ道ゝ聞ゝ様ゝ
ゝ様ゝ情ゝ様ゝ人ゝ道ゝ聞ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
くゝ様ゝ仏者ゝ頑悟ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ事物ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ
ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ

なく、さてある限りを過よ去るに、死を老ハ又も過るあるものなるべし。やがて一日、さてハ一月に過ぎて死し、一月
、さてハ一日に過ぎて死し、一年に過ぎて死し、一年に過ぎて死しかくてハ、あるべき限りを過ぎて、墓に
遺念なし。こゝをもて、おさんなるよ。おさんこゝも一月の事のごとく、
已に迫ぬ。まゝにあなかなく、方法さきてさて日のひを待暮くきゆ
き、ハ、の恨のあるべきなん。われあるべきと偏頗ハ大きなるこゝろ。つ
まる天気をたしなく自こゝろわきまるべきハ同じ。こゝまでなれよ
こゝろねんごろそこなるべ。われ永気はいとくやうちまるきよ弱
こゝろよそくこゝろハ人々なるあるべ。前も世に歌よなしひく。

天地をうけし一海と成そのあるべ。咲くべ春月おさ花の
花
あるあるべ。見るべやハやあるべおさ。不ろ。さて春むも
梁を
そなるべ。ものなるべ。わさ。ものわよ。ねとハ
春。
海と世作よ。兎唇も嘯もくさ作る。若さて
おのくれ作ものあるべ。前を歌をすべ。
不枝不求
産年人人。前の歌作べ。若作べ。産年死はけし。

中よりそ[illegible]いくやうにそれかのそれ[illegible]すとくるハ毛詩の風
をくれる[illegible]のるうつまそちとあそれやうよそくれハ[illegible]とくハ
為国家[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
やうにもむさるるうよあ雑とれ[illegible]ハ[illegible]
ものなくうけさきの法[illegible]ハ[illegible]ハ人のうくれて人ハ[illegible]
せとそしまあくくらやまあ[illegible]
いひたれやるとさらけ山序よ詩のうくれを[illegible]
婦人の[illegible]る待ち[illegible]ハ史役よ[illegible]
て[illegible]およそ[illegible]の男の切なるまを[illegible]
瞻彼月悠々我思道之云遠曷云能来[illegible]

いくく度の月も、ふ月もきぬさまは月の仕業とは人くもあまと
ともよ悠々とかの黄衰男ハあるくく路をきかなまハ我
夫の帰らむ程もうとくくく

つよ。ものつよ。人とそ。ゆ。人よ。貪ぶ。ときは。ゆ。
てそ。おとさ。ゆ。ゆ。ゆ

殘やまとうて。孤絃も纏徇も沒たはかすうら忘まうらんとひ
とまるとは人きハ。わくらもむかるとこのやうのやまと詩よりかさく明朝ハ
人を儒者の一頭中ぬのすてく学ぶ事ハ人なんかるとなるんかるとなれハ。を
むを和歌くよりあるとを。京師和歌ハ名家かすと。翁の山歌をき
きくハさてを学ハ詩ハ。ものさまと。詩を人情よ家をとわきハ。
なのおのいくさるるとのかるくき。三百篇をんくさうくし。和歌ハ人の
心を捨として。よ詩ハ。ものを人の系とかるまとわきハなのおのよ
ほうらまとのかるくき。萬葉集をんくさうくし。ものかるくき歌
の風體詩の風捨ハかるくきなるまとそれを。翁の学るかるよ
わ捨ひハ。文沙詩くを人を。

春秋ハ花ハ

こ詩ハ。ものまとわるけ。ものを花ハ。もやうくさるを
よ。萬さく方をもとひ。春よ帰くを。ハ今るを花ハ。ハ雪
ハ雪とを。ひるをあらくく。人詩。ハ。する折ハ心望絵る音
をくを。ハ。華折をくく同事をぬかるもとを花のとかを
まとををくを。校歌よ。ものひくくを。ものを中よ。ものを
のまるを。春の花をくを。ものを。ものを。ものを。ものを。
紅葉ハ花なさをよ見きハ。ものを。ものを。ものを。ものを。
又ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。
林万壑ををるを錦ををるを。ものを。ものを。ものを。ものを。

今ゝ世よむ人ゝ多くは義山の殺風景なる議もわろく侍ると
ゝ歌ハ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ

さ陽き氣と成て、新の樂は揖讓より出るなれば、其樂の實優々として春の和する方より發出て、大に春の花の陽和に氣わるゝこと、其の樂は伝代より出るなれば、其樂の實慄々として嚴なること、丈に秋の霜露の氣あるごとし。

ハ法も聖人と云ひなのら、新やはくほくを原り、義も高きよハ和らぎ、新は比すきハすり、落きかゝる、それ故に新ハ善にして、義ハ善にして、善にしてさねなるもしさるを、ハとく春も秋も天なるべし。天の德は同異なるとそ、云へ、義も聖人なるべし。聖人の德は同異なるとハ、云へ、義も聖人なるべし。新ハ谷の陽和の時なるべし。聖人の幸なるべし、義なるべし

風霜の時なるべし。聖人の不幸なるべし、されハ義程子学を修むべし。所遇之時然爾と、へるなれ共、やはたゝくなりと始終よく、かゝるまハ修る法なるハ、の里に居へるやと云座中に人々も法とも感考へ、日に新、若たゞ義のいまゝ若たゞ

ゝとゝとゝ云へるゝ、ゝ月ゝ、ゝ月ゝ、ゝ月ゝ、ゝ歳ゝ

花ゝゝゝちゝゝゝ

ハ別段なるのみやうよいと悔くを得ぬけらうに世の談より
作〻ちつなきまよはきてはおうとどのやくいつきをも嘆き
を味わるまをとえ作る徐よ秘るハ睫まくわおうちのきは
及くるえぬよまくいれ素質ともの立唇ぬまく作ら氣そのる
まくれ孔子も彝の邇言を有り作ふまく大紐を称り作ふ
さるを八翁堯の言も聖人擇焉ともまくいむり孺子わうて
滄浪之水清可以濯我纓滄浪之水濁可以濯我足と
歌ひ給ひ歌のかをハ之くく聖人ハ不凝滞於物世と推遷る
のをまくかく歌まくもわたくしをとき孔子きく作ふく水すむ
ハよ人纓をわ洗ひ濁るハよ人足をわらふ纓をわ洗ふもの

ハ自ら取るなるのみ小子よくきけとの給
へるを八栄辱禍福ハ藻よまくを決ハ取るとるる
ひ歌まくをるる作る者人ハどうのもちてをおとをくもむよ
まくハなるるへしこをを初の歌とくわたくきくを作きまよ作
歌を前ワてまくを時京師よりをとまくの老儒あまくしかるる
きまくを作おるをくを作ハ
東照宮御左世の時れを芳のワのき老よ汝等ハ文をもつよ
簡要ハ語わまくハ字まくいくもわまくいくもわまくいくを
をきくをきくをと作ふまくよ作ふまくを東照宮ハ又ハ字まく
いくをくるを七字まくいくを文のわをを書き汝等ハ文を書に志

ろくろくとして意わずしてとなり、当世の人たちは只
けけ分の行をたらしたるまかりあたりまかりあるいは
ちよ華麗をかざりとすれば行よ家どもち崩し、公義のことも
く猶奢りもあるべしとぞ、或諸侯の家老伯のしと、ひとの
万石以上の分わかれ、公共国おく登城の時、わうしゆ太鼓飛
をとゝまるゝ路次中おくあわせぬきなる行よ玄関の扉よう
けくりしなれど其うを君打ちもの奢りをうへ尽くわ
うまハ国よりせ代家ゝ物をとて入させよと、それらとそ又国
丁後親衛の家おく物頂あれ若美合十あおく云うへの猶武
威せゝ今当家中よりき行の今おく猶威をへ人わよ寄也

武具ハ格別のあるまハかくハ活撥よきなるなを子孫わつけをを
よく知くあるべくこれと一番きくけの鎧よ浴く家ゝのちしきをと
そ入国ゝ此諸侯の中よ世よ賢君と称するわゝしよ其家老代
ゝ家等わつかるゝ蒔繪ゝ印籠よ大きなる珊瑚樹を緒ゝ
めよゝて腰よさけあるを其うを君及とうめらき他日よ其人とおへ
よしく汝ハ下箱を好むとゝ人へくゝ下箱ゝ茶とゝくとのなを
元をさけとくゝ正ぬゝ下箱よ本棗ゝと緒ゝあるゝて賜ゝ
きをゝとゝとゝ国の貴族皆恐をて華麗と称せゝとかの
ゝ等ハ皆六七十年以ゝのゝそうゝ、ゝの行よ風俗ゝ驕奢よ
ハなるゝゝ馬具武器ハ軍装よかるゝあなきハいゝハせんゝきも

華麗をもとゝし。その數奇をもすゝめ。ひの用をなすもの
おほんで。いやしまるのなり。古きひとの。こゝろ。大坂夏御陣より。
將軍家惣陣を衍巡見の時。なを多作濃ちゝ。淵惟子をもつて。
胄ちうすゝをくゝ仕せらまつりとなりて。又加賀の家臣より山崎長門
ちとゝ。ひ〳〵名ゐき武功の者ゐて。後ゝ祝髮をもつて閑齋とそ仕し。
翁真子孫なりとゝ。ほ〳〵糸金をもつて。この年秋大坂を陣の時に
せ〳〵ゐとく紙子羽織より流九のゐをもつゐるゐゝゐるを共家ゝ
蕊ゐをゐ。元弟ゐゝ真武軍裝の好きをもつて況や平日の麤
飲食家化ゐるより義英をもつて。公用のゐ以金銀を費をそ。な
けゝ。のゝきをなを。古ゐゐ太平ゐ樊ゝゐるとゝ。ひなゝゝ。ゐき

城改をもつて。八民作日より敗ゐ國ゐも日より衆ゐるゝ。但共ゝ源
をゝゝを私欲より起きて。上より月をきゝ。外れ行と者ゝゐゐ起るを。
東照宮そゝをかゝゝ思ひて。ゐゝを作ゐゐ。ゐゐゐ。但ゐ
の驕ゝゝゐ病ゝ上下ともゐるゐゝ。ワゝ一身の奉より限ゝ。
古ゐゐ。我國の時を將ゝ人自ゝゝ誘ゝ力を恃ゝ敵を慢るは。
必國を失ひ身を滅ゝその例和漢ともゐゐけゝ新ゐゝ。永祿
天正のゝゝゐゝ。今川氏真武田勝頼ゐゝ。ゝゝ。ゝゝもゝ
ゐゝの月日をゝ。ゝ身のゝ行ゐゝゝ。ゐ一旦の強きゐゝゐ
ゐゐ。ゐのゐゝを滅亡ゝゝ。のゝゐき所月ゐゝ。ゐゐゐゝ
料簡ゐゝゐゝの行ひゝゐ。ゝゝゝ。ゝゝゐ。ゐゐゐゝ起らせ

法印は威光日よ盛なるとき、さらに語らせ給ふべきなり。常
よりは身の程をも考へず働わびしハすを得きハ王の寸尺を得きハ王
の天下を治ん。終に天下を治ん。此心々、さきハ右の文字七字に決ハ不
ふつゝとて始きれたる者なんと思ふ。後学の低徊すべし。
佛法なるやう
座中に云ふ。元を開くよりとゝまりて身の程をもたるハ、ものゝ
ことも
のゝ道施を学ひよりも要訣あるべし。身の程をもたるひ
わのやうなる慢なるハ、の妙理なるまハ、ものゝ引さけ
く身の程をゝんぢく全備するわくわるくいとゝハ、前ハよくゝん
ときき法ハ、なる程さわく法なる花きて地獄ときゝおる大

藩のうゝよ刀物の目利よ長しゝ多るわゝしゝの。或時立張の多るき
刀をゝんく元八相別よ正宗なるゝとくく年の法よみせ給ま
多るに年の法しけうゝ法元も志津と刀ゝくゝ中ゝ正宗
わくくもなるゝとゝハ、やゝとよ正宗なるゝ。法よ教けあくなり。
よゝ刀ゝ刀ゝよゝの中くも正宗なるゝ多教問よゝ
元ゝとわゝ程よゝ得多るゝ業よゝ元ゝハ、ゝ中ゝ取て表
ゝよ法ゝくゝ元ゝは、ゝ刀ゝよ志津よ作る得ゝ思ゝ
ゆゝとゝも正宗と八見ゝゝを、ゝくゝ年場る程よ右の文君
もゝ世程ゝゝの二代よなるゝくゝ本の法右の刀を持
系ゝくゝ法頭者の刀はるゝて正宗よなるゝくゝ人今

文先君御月利の法とさよ、法をも聞くはやく之尼
家花と共に其子細を問給ひ、其の孫おきぬ不思議よ
子法男は後生たすかるべきやうなるとくは日ごろ為其
う家よりも易くおぼえしかば老人あり常に念誦打して
後生ねがひ孫のねがひしかあるはなくなる山伏は後生の
孫のねがひとのく修行に入るこの孫ひやうしきわく
是くは、あのわち凡夫の分として俄に佛なの成んと孫う
へはやうく佛なりきはめ、佛なりきはめきの佛なりとなりぬ生よ
き人なの成すくと孫のこと人なのやうく後佛を
孫うこく仏なるよ多あるくしやく法とおもはくく。

先ちなるよりはしかく彼刀もちくは正宗は鈍なせんと刷
修よ長く正宗なりしかはなんそきよりもきき志津
おしく思ふやと存しはく。志津の鈍とは法さしく
刷はへはやうく正宗は修よさくて我と思しく、
つく、まくときわけ人へ入ものるは正宗なのやうく法
といはとなの正宗の鈍は用をもはけもして。其刀は分
よ度〻多数志津をんをして刷し修よ法ぬよ正宗なのたり。
然は拙ものと聞くおぼえしかはよ元しく。其後さ
ら酒ものは庭わく二人重は先後とあるひは辞退をる
よ。ものとものの門。戌亥次年よわやうはやうは重を法の

ゑとゝよ。其相模の入道殿の年もそなたとわかうち
ひけすゝ。ゆくすえおそろしき。なきあとの年やくもゆく
ゆく。其時つゝ我世其ますくれば。大きなるひゆくを急
ぐあやうさとゝ。なきゆくもなくれば。先ずちの世の年多
うるこのやうなるまゝにてせくそなきゆくをひとうそもそや
とて我ゆくひゑとゝなるを。相模殿よりまけくるをとし
ゝわ。彼老人の佛の祈うゑやうとしけるこの年は祈ゑ
やうと思ひまなるゝ。ほとをもなる遠よ思をうゝを祈祷
をとるゝ。早迫なる所なる漸くゝ祈ゝ得なるゝ。
ゝ八南度のをつなき拾ゝるゝのやうなるをとゝよくおゝ八

まゝとよ秘すゝ八睫ゝくゝ我ゝ給ゝ。もゝくゝよゝを学ゝ聖人
を見わくゝよゝすゝまゝくゝ八給ゝとゝ。為ゝ用なりゝまたゝ
わゝうゝて汝の行を省ゝて八道やゝくゝなくゝなゝ
ゝ。一生自惜ゝるゝまゝわゝ。ゝくゝやゝなゝん。右の老人わゝ世
の学問ゝまゝ大ゝ。ゝよゝおゝとゝ為ゝるゝとゝ。ゝ。右今ゝ明の
人の行ゝるゝ八大ゝうゝあゝよゝわゝやゝゝゝゝゝくゝゝゝゝとて
ゝ八虚見ゝくゝ我ゝくゝわゝき道よゝおゝ見ゝゝゝゝゝ
のゝゝ也。今此世よ鉦儒と称ゝる八ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝゝ我見ゝ自ゝ為ゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝ大ゝを吐ゝ為ゝ人の上よ為ゝんとのゝゝゝゝ行ゝ

後に世よりてこれをいさまこと。自分あと聖賢のやうに異ひなる所なく分れ程と高くさうなの高きなる者にしに見れば人に備はるものとさらくしに

仁は心なり、のち

わるる時例の人くそもひ生ずく傳習し来れる。仁義の後よ及ぶなり。中よ初めとなる。流れて人と天地のうと情くうとなる。天地と万物を生ずるとなるとくうとするなるそきと得くうとすれば人と人とをするとくうの徒や、

すれば句後なるとくうの徒や、

人徒とわれは仁義禮智諸もに行ふ者なるべき程。

仁は心者と包こく義も禮智も仁よりおこく生ずる。それは前の論に申しかしこくまもなく行ふ。但仁は人と共に

すれば仁はわれとやうとなる衆義の一長とすれば多くもも知る所やうよりとも。たうて人と多く意思と生一と

すれとこく仁と衆善の長とすれとこくこと情行れ。

これは意思の生きまと、こく。当つ生ずるやうなる。今

仁と人徒とすれば。やうの一長り此流きまわくは

わるまくこく。こうなるは意思此人のうん徒や

やのこく義も礼も智と仁なる生ずるあれ

われんと工夫すべきまわく行れ此と今おし和

[illegible]

次義を用ゐるハ必感ずるなり。不義を用ゐるハ必恥ずるなり。義を用ゐるハ必感ずるなり。情なく義を用ゐるハ頑然として鬼畜木石のごとく痛さ痒さ感ずるなき人倫なり。ことごとく自己の義を用ゐるも聊か敬せず。義を用ゐるも感ずるなく。不礼者、清きを礼とし、濁を礼とし、各其所をうるものなり。其本体を保てば外なし。人として不仁なるハ義も礼も智も其さ所なく其用なしと。不孝内より生ずるハ真礼徳よりあるなり。公礼理とあるなり。真の礼ハ仁徳と一つなり。公礼理と一つなり。その一さ徳を、さ仁徳を見れば理を、さ礼理を、さ義を、さ智を、さ信を見れば、その一さ

家平は始めきこえあるべしと考へ給へども、其よりはきこえ給へども、
地位なりて侍べし。相列の輩は、幕下佐野の旅宿に天徒寺豪
健の勇将なりしかば、琵琶法師と扮ぜしかば、家を離
れ給へども、ほうく帰らぬ先よ琵琶法師よりこれをもて
其をもあをきまやすれば、其をもとき給へ、
て佐々木と云へば、法師に得給へとく、佐々木四郎高綱
治川の先陣を給はれば、天徒寺はこれを家平と信ず
さく今一度おもくおぼしきやうにきく給へ、那次郎市
宗高の勇を語り給へば、平家は天徒寺まで
浜数行に及ぶ、後日は家平は軍に出て見れば平家は

きこえけるとて、家平とも、乞おもくに為きまゐらせ、佐我
殿とも知らぬ得はまゐらせ給へ。お後二郎とも、勇烈なる
るまゐらせ給へ。あをもやすらもすてもいとなる。
涙感涙を咽とをきくに、こうのまゐらせ給へ。今
不審やすらまゐ、法師ともあひとて、天徒寺おと
法きくに、今をもて名を頼をもて思ひ給へ。今は
一をもてさくさくに力を為給へ。先陣をよく
合点をきくに、頼朝舎弟は蒲冠者も賜へ。寵
臣は梶原をもとなるまゐらぬ生嗟を高綱は賜へ。
やさきは其甲冑をもて佐々木治川を先陣世

者ハ人より先をたゝさきなのけ必討死をなすべしとの
ものなり頼朝よりと後を考へおけば其志を奪ふ
人ならずよわきなる者ぬきこの八とゝ考ハ波と拭ひ
たはゝわるゝ、ひけれども又非次與市も大勝の中より
撰ぶべきに一騎陣頭より馬を海中より入れ的
よむうつくしうこと深手まで家鳴をたゝかわるゝ見ん地
きれよりし射換じなのけ名れをもの馬とよ
く腰のきり切く海より入むと笑ひ給ふ人我をもつてこれ
ひ武士の名をわるきこゝろ知ぬ某ハ毎日戦場より除て
ハ高綱宗高のゝ鎗とゝれ有古の武士を用ひし

者人の人と異ひやすく為流より多くさゝるゝ考ハ
名をもわるきよりなるのゝ中ゝ仁義ゝ
各の武名をもて多く一見ハ勇氣よりのせく真實の
出れるゝなるもやと思ふ考ハ頼朝の
こそ出と云ふの八諸侯忠感考く辞なるこなの
天徒寺の武名ハ涙のゝ考ハ仁若ふるわれ
と武の一筋八仁は根さして惻隱の心のゝ変ずるわ
勇に武を殺獲のゝ考ハ仁と武ハ
つゝのひわるやうなきとゝ仁ゝ
や其作ゝ考ハ武ゝ考ハ忠義と

文道も我身も内より流出して溺ひるるかたちなるに
おのれさきに真性のよわるに元則おのづから人を信ずる物の
義をもとめの心なのみ。すなわちくも信ずるの言行ともに義理
よりあらわるるとなり。我ひとりの心のみ出ずして天地寄の源をうる
ものなるよわるに人倫の全きなり。仁義といふこんなるお意なり。

義とは人のみちなり

在中心をもて仁義礼智信の理をあらはすまいくりを
命をきく流れ今形をもつてきはめ仁義礼智全体なり四性と色情
よ四性の中よりもとめて義をの理を掲ぐして仁に対して仁
義なりとは人の義も仁よりなるべく大切なるものとみるべし

序よ義字の意をもとめるべきなり
おのれ天よ陰陽あるこうちなるべしよの故よ易にも立天之道曰
陰與陽立人之道曰仁與義といふ。さるに六軌元ハ春夏
四時を統ずるなりいまよりなるに秋ハ肅殺ずるなり殺生
の功をなすをもおのれ人道もまたかくなり。仁の四者を色
ものといふ。一命自覚すれどもおのれをもて義の裁
制なるべし。礼生道を換して信も七ひぬ色、翁ものく
物学ハ人よりなるべ義なるべ人きをなるべ学ハ心之制
之宜とは信なるべ礼制なるべ人きなるべ事之真ハ事礼
きをもわかるべきよ義行よきをもわれなるべ人礼きを

なるあるべく。仁は心之德也之理とあれば。其の理すなはち仁
德なり。こゝをあらはすを善と因例なるべし。善とハ日用行事に
よりて取與去就の間よりて合糊不斷のんをおしくるを
いふ。道理よりあらはれきたりしを善とひとしくして苟且
因循をいふ故とあたるべし。遷善改過と改るを各分て善を遷
る事速なるべし。又なの事をとゝく傳をすべきやよりて方行
をとゝくんにきをわる義下此とすれなわすれよりも君子此以
辨一義以為質とその條ハ也。又坤の六二を論じ敬
敬以直内義以方外とのたひ又風達を論じ質直
く好義とものたてを義の簡要なるをとゝく。

多くの人の害をなす。仁義の仇となるなり。私欲をもつて私欲
をうるなり。邪智を傳き。不物を引きまく。系の仁義信わり哀
をもつてすなわち。我なるなるなり。忍ばずして忍ばざるなり。
ねもとに天下のかのひとのくるをもつて人欲日に盛なるなり。
多くの木。我義の蠹るごとく。其生氣絶ぬるハ喬木と枯
槁は同じ。ともに正をもつくんにきまも純なるなり。行は義にた
りよう。終をくるなり。此きまきの生ずるなり。
其をもつて腐ぬるハ利刀も複鋏に同じ。是仁也。ものハ義と
一時にそなはりて。家人わらねばなるなり。孔門の学仁
をもとゝもとゝ安をもつて仁をもとゝもとるに。杉に勝をもとゝ。

顔子仁を学ぶ。孔子克己復礼を教へ給ふ。礼は天理の節文人事の儀則とわきまへ、身を検する外防用にして、私を絶ち、枯槁なるべし。一日私を絶ち礼を復すれば、よろづのよこしまなく、ことごとく礼に帰し、万物を和するなり。天理流行して判然たり。然るに欲なきこの故なれども、進修の用と同じ。その実は、人心虚灯事物なく、天理人欲の分を真ふ知るべし。まづ私を絶ち礼を復すべしとなり。礼門の教は、博文を約礼にとどめ、大学は致知を主とし、正心を先とす。されども仁義は、すべきことを人に教へ、礼者は

仁義は、礼の理なり。易は聖人の徳を論じて、知崇礼卑やすかるべし。知崇は天なり。礼卑は地なり。いよいよ崇くして、卑しくして、卑しきを成始成終の道とす。ちなみに、礼は成性の法なり。撰渠の張夫子、礼をとくして教をとかず。礼は成性の法なり。撰渠は限らざるべし。濂洛関閩の学は、格物を先とす。格物は敬を持するなり。敬は礼を成すなり。

浩然の氣

第幼より、てんかの世、世間に入り、人事に入りて、仁義礼智を知るも、関雎を法道成能とし、人倫を成ずるなり。今より後、学者は、

へ神ともいへ一云々不思議よりひわたる所まで名云とも
りつのへしさ〳〵仁義礼智、信も大切なる中に仁は浩然
義の大切なるまハ孟子浩然の氣ハ至大至剛天地の間に塞るといふよりこれ
まで、各考ふ見給へ、孟子盛大なる地位なるハ
義と生ずるやうにいふよりやわらかく〳〵天地の正氣と情ふること
浩然なる地位なれども私欲わるくにかきくもりなきまでなり
なり、其氣いたりなるまでなり、ちいさくなるまでなるは
浩然の氣ちいさきまでなるまでなるとなるこれ
なきにのくせなりて世位より半ばにさんとなるにもも

まハ機緩よまうせ、調子よ宗しなとく一緊よあと決ひ
ちく快しとなる、ちハ真ばきまよわ弱ひ及く大よ氣とそれいな
ひ、つれ丹もたの間まのうちいかくきれ物よなるなへなを
こうちなまを孟子よ義を集ちく生ちちわまハ一時一事ば
きまちくきの間ちをなく浩然の氣と生ちくきとまちわら
ちを其工夫日用ばなる事の大小緩急ばよ為ちて
ハ、さこう孤負せぬ多平なるよくばきまを用ひく一劍兩
斷ちく宜きよ合よわ、たきうしなるひくかくのとくあ
てやまりハ氣常ばなるこまちて丈夫よなる行よ後ちを
氣のうちばきまを助け情義と合體ばいおのけうち浩

強弱の中も知られ、但氣はくにつけきを勝るといふ中
より體德をくはへきまり中庸やうくいふて二人わかれ拂
意の附くを高く拂曉よりゆくてなくうつひわくせたる同
く起るよりくるまくを意よりくるを痛くおくるものこれ
ハ十分にしてもとも世民速よりおく其教をいふと同じ禀賦
の強弱よりるもわかれその才やうより起る若し上中下
酒氣わきハかのよりを氣はくく心のきを勝るのを強とすべ
きものあり浩然の氣を義より生まれて其生まれる氣の又
義を勝るるをいと奇妙ところ伯夷あり幸韓文をよくく
其雜説の中より神説の中をとりあつめ説に要異

なるの物の氣を噓くく雲を生ず又口のうくるれば雲を寄く
月月より落り陵谷を泪くくを雲を移り生ず一てまい説の
變化をるもくはよりわれ今浩然の氣ハ人ハきれのまきて
て又つけきを我勝るるよりたるるを人一ハなるやもいとくを
氣力をもちひくよりきを強きをとしむるきを盈をするハ
いそのの勝をきをるくの其宋人の苗を拔くく長すれの類か
ア小氣自然の生路を妨きをくく大きよ集義ハ害を貽す
多くの多なの其化為もなく集義をすとすれ中に憂ハ
必有事焉をいよるるハ人なのふそさく為く緊要の中
わきハ朝夕そよりくくをくすくおのねなのそのくく

集義すれハ必定一事わすれず必字最力あり人皆一定する
事なるべし志のうへ、おのゝ世界ハ人皆ハ助長せしハ
忘る勿忘勿助長ゆゑ人の力をもつてすれば忘れ
しせば助長ゝ せゝて人皆さき我用ハ人あり
よ必ゝ又ゝゝ浩然の氣もやまの事なり
先儒とゝ持敬の法を論すれハ敬もまゝ
うゝ ゝ ゝ ゝ 儼然ゝ ゝ
わるゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
をもつて拘定すれハ他病をなして
朝鮮の李晦齋ハ鷄卵のをわるゝ

勿忘ハ必ずよろしきを忘るゝを忘るゝハ人皆おのゝ勿助
長ハ力を急に握りめぬなり握りもまハ握り潰す
存心集義二致ゝ ゝ 持敬養氣二法あり
管要深切なり 敬ハ工夫
在中ゝ 敬字ハ義を 程朱ハ最詳明親切なり
ゝ 敬ハ工夫ハ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

まゝハ結局但行業共後わるく反復切要なるべし。吾
黨ハ學者ゆゑ以遊ぶ。いかゝむつかしくなるべき。
反て徒業ハ人のまねをこのまず常
人のなすわゝ作法より引さげて卑しむ。敬をもつ共むき
ものをいとなみて行ふゆゑねやゝ。ふつゝもよく成ぬべし。
のちのちねやゝに。身のまゝとなれやゝ。まゝ月日をけ
なれやゝ。元ゆゑ敬をもつて事をこゝ。前ゝ法
ゆく。浅きやゝ。よそ。法もしく反ゆく。起やゝ。やまきやゝ
よりも。易しく反ゆく。勤ゝ。各完成ゝ驗て反ゆく。主
一定適も常慢ゝ法もゝかよりまゝ。学ゝ法ゝ。新

しきゝ。存ゝ。天下よ。元ゝ大切ゝ。又元ゝ多ゝ。
ものゝ。ゝ。ゝ。孔子も。入ゝ時莫知其御とのゝ。
ゝ其元ゝ大切ゝ。粗略ゝ。元ゝ。持ゝ。
存知ゝ。心放逸ゝ。諸悪ゝ。
ゝ。ゝ。敬ゝ。大切ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。執玉捧盈ゝ。ゝ。
寶玉ゝ。盈ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ハ法ことゝ〳〵くして神妙霊治する地なく筋骨むなし
く云為すくハたらぬとのみくゝ有るハ人に接ず有るハまた
ちゝうゑ乳ざる乳くちく常ようの事ハ何ぞ有れ共まを用ひて
彼へ移すべきハ水のたとへ一ツとして根をきし
くとゞまるおそれなくゝ麻ぬ事なくうたゝ
荀子ハ気を偷心とし乳釋氏ハ色を流泡想と名付く気
象人ある人共持病なるゝ今翁ハ真垂ものく
ゆうねやうたとゝ乳と療する主方とゝ
ゝとくゝ少ゝ屬するものなる人ハ
かさき礼きく用るゝ黄勉齋の、ゝ

一炬の火のたとへ其年を降く川事く火をとゝ乳ときゝ光
ゝ乳ゝ乳ゝ乳

ひ、其外ひやうハおよそいとくく孟子養氣の法よりかなうこと、前かゝゞ孟子、我よくおとくらく、浩氣持敬とも、必有事焉とゝ、一云ゝ、もとやその理ありとなるまでハ、いうゆとなるまでハ、養氣持敬の功夫多くまうわれん、ハたゞ面目なきハ鳶のとび魚の躍おとるやうに、現在の高遠ゆゑ、とゝ、ハたゞ離まとゝて居るまくのゆゑ、毫髮もかゝるゆハなるべき、その有事焉をうち忘る、助長すきハ氣力を用ひくゝ、偽をゝ忘もせず、強て他為もせず、其間ゝ月毎の天據を月得ゝ、持敬の法とて、若加減よあゝ、時、わるゝ士人持敬の法を用ゝ、前持敬の

法をわらはゝて、そよあくく、其大略ありくゝ、あくくハんゝを悍馬のごとく、持敬を悍馬と御するこゝたとゝ、我氣あるゝて、鞍よゝく韁ゆるゝハ、馬駈ゝて、沒駕ゝ患ゝ、忘ゝなゝ、ゝとゝハ、とくく力をもくく馬を制ゝ、ゝ、韁をたゝくゝ、馬ゝを痛むゝハ、馬なゝ、苦ゝて、ゝ、ゝくゝゆゝすゝなゝぬゝ、助長するゝ、ゝ、多くゝ、ゝ、ゝるのゝ、ゝ、ゝ、及くゝ馬ゝ邪氣をゝ、ゝ、後ゝのゝゝすゝ、ゝ、ゝ、

四十年より、義をかすめ、共同し人も、人ハ背信するなかりたたるべきなく、肩感憾いかく必ずなく、又民を者ハ天

民を主者ハ天

わかる時論語御黨篇の講注にその式負版者とある、

孔子時、衛霊公ハ衛国の君、孔子ハ魯国の人、衛霊公ハ孔子を待遇して上客とし、俸給を与へ、衛国の人民ハ孔子を尊敬し、衛国の人民ハ孔子を尊敬して、衛国の人民ハ孔子を尊敬して、衛国の人民ハ孔子を尊敬して

さてくわかとし耕作を粗略ならしめ風俗の本治
亂に係る事なれば今其の始を作りもむりこの代の時は
民をもてなすに天とすべきものなれば租税を落し出歓を極ひ困
厄流離せるものなすこと奉し食をもて天と
農業をもとにとわ米穀をもてして市朔も稀なるこの士大夫を
せるこの所に其風あり市朔も稀なるこの士大夫を
そこめ商賈等よりも天根勤倹にして華奢をいましめ惰
の俗あるものもきこの暴秦よりて民を天とするものの
程に頭會箕斂民を虐取せしこの郡國離
叛き四方土地くに崩れ天下乱民間より起りて炎

漢起りて天下秦平定事よりのち逐鹿射利の後
刀より富商大賈封侯より食貨の柄を恣にす
この村閭の民もて化して豪奢なるいき游侠を事とし賈
誼治安の疏を見るに民を天とする此義
踏て志行を下しに農を天下にいとなむを勧国
に告諭し租税免し後を賜ひ郡吏に貪欲をいましめ其上
孝弟力田を設て下に率ひ勤くに崇ひ未を抑
まくはるに漢史に見へる文景の時君臣
恭倹にして隼厚を敬せしまこの代に治世もの
そよりそこに考へ上代を格別にくに後世

なるべし。郡県は風市朝より移るゆえ、市朝の風郡県より移るハ
わけて其かたより市朝の風を奢侈を貴び郡県の風を樸素を
尚ぶ。市朝は富商大賈の家あり、ひとり公よハ法禁ありて貨賂をもて
郷より貨殖の家あり、ひとり公よハ法禁ありて貨賂をもて
くとみゆ。ゆえに私にて利欲をもとめ宴楽にはまるハ
是ことに私智を逞して己が悪を隠し、人を欺き人を侮ることを
とかく市朝に謀とし、其省略きこと食膳衣服にもし、歌舞艶
麗ひ、一月に費数十百金に及ぶとも、ほとんどを風流とおもハ
ずして、倹素なる人をこそ、ひとをもて称ずるなれ。世俗
是ら田舎人なりとて、聚まりて嘲笑ふ。

の齋語衆楚の味しき事多く、稀に一流の風となりて、
田舎おくも思ひよらぬ事なり。華夷殊にとめ、詐偽
なりとおもひ、いとかなけれ、世あるべきなれ、世あるべて驕
奢を貴ひぬ。其の費用過ぎなるべきを、己が諸欲
を恣にすれば、金銀なくてハ、強き行ふ。なくて
金銀を貪ることもとめさるハなし。よくく天下に金銀ハ
有力に人の多ハ兼并せらるべく、私のけうに流りも浮
るべし。そもそも金銀を世に賤く、米穀を年々
多くなるに拘ることハ、金銀を用ひ貴く、米穀を用ひ賤
食源のたとへ、やしき米穀をとく貴き金銀を易る行ふ。

家貧しく、あら次貸殘の家に、貴き金銀をとて、やゝ
き米穀を買ひて、家貧しく、餘まりあるに、たつとき有數の
金銀をとゝく無限の驕奢きわまる有用の金銀をとて、無用
物に費やすなり。金銀日に虛耗して、わまねく民間に流行
せば、おのずから粒米狼戾きわめて、價廉なるべし。民間貧
貧民ばかりなるべし。されども、もとむる力なき人は、富民は常に膏粱
に厭きて、かゝる世に、富民は常に肥耳に
飽きて、かゝる世に、餓死する人あり。中に惡性なる者は、自から死
を救んとて、ハ法樣なれども、犯して、盜賊をもすべきなり。おのずから
見ては、世の困窮なるに、なほ、なほ、なほ、なほ、驕

奢をとゝ、怒りとゝく、一切一切、なほ、なほ、なほ、七十年
以前に、世の今よりも、粒米繁華なりしに、もとより、驕奢、
なほ、なほ、なほ、なほ、

宴安とのゝ惜く其鴆毒なるを知ずして諸奏淫侠なる
ものもあやしむよりあらしまゝ貨殖ハ家遊侠の徒を論ず
ればなり其弊郡縣中も移りて今とくも田舍
よりさへ古風のなくなり市朝ハ地中もおなじかるを
民やおろかにして鹿暴なるまゝに悪とする人もあり又ハ
一藝ありて分別なきハ初より猛俗より陽く心に怒りなきた
てあるまゝもあるべきなり市朝の人ハ郡縣をたて人を
そのはやりにまかせなき初めおのゝ行ふるハなる方もあるて
惠を感じやすくなれるものなるもすべやうなるに已のなるとも
あるものあるべうあれまゝとをるまゝ故やうなる弱長たる

人民を天とするハ人を忘るゝに家ハ豊なるをくるしく賦税
をとゝのへ飢を患ずして父母妻子を養ふよりあるやう
に相計らひなば民業怠ることなく流離ハ愁なるべし
さるにあらず條法を設け威刑をもて遊情をまゝ俗奏
を禁じなば一郡感服をなく好風俗となるべし郡縣
縣一統にかゝわるなれば其風おのづから市朝よりも移りなん
今市朝にあらゆる人数繁しとなるも天下ハ郡縣に比せば
十分の一にもあらざるべしまゝ市朝の風盛なるまゝ郡縣
も移りて況や四方ハ郡縣谷安靖なく阜厚なるなれば
其風天下に移りなく撲實日に傷華靡日に減しなんぞうらハ

驕奢兵乱やゝ衰て俟事の後ぜんせんとこゝろぼし。

富士山すそ野

多田ゝ多ゝ民を邦内に牢籠屏蔽して郡県の民憔悴流離して天下の勢もまことに落ぶれ。

古ゆゑ民窮して乱を生ずと云へり。郡県危く国危く郡県安ければ国も安し。されば郡県を治るのうるはしきことは

とわくしみなとの凡俗のもとわくハ此にむ

憲廟の御時。あれ士人の好学あるを見て。其人按察使に命ぜられ

きゝ畿内の郡県を巡りて。前途に臨く学問の師に贈言

とゝしに其所に遊中わく富士山の下を通りぶんけ

そのとゝ見くゝ極のきはに山を引て行のとゝ見へおのくゝハ

ゆゝしかりけるとゝ見へおのくゝ土下にて下の堺厚なれ

わくゝ地に拓ぬ。ゆゝ上にて下ほそく上大きくして下

小さくハ忽ち崩きたくゝ山落上れ為とおぼさハ多く下を厚く

すべやうに沈をこゝろぼ。ゆゝ下を厚くすきハ沈と云へ

そ易の剥卦のこゝろなり。剥卦上を艮と艮ハ山

下に坤地坤ハ地なり。地上に山ある象なり。山ある

くゝ上に住ゝ地ゝ下に地に附くゝ行ゝ地に山ゝ地に基

とすべきなり。人のゝ上にある人ゝ民に別為して下を厚くすきハ邦

安くゝ山に地上に安置すること。ゆゝ下に別為ゝ上

よまの世ハ山在地上の象なれとも、なほ
其よ付く所の品業わく考ひ、只今市井会類の使多く
府内よ於て、国の害をなし、第一人家よ火を付くるく
大害我朝ハ元大方ハ郡県流振わく、郡県困窮して流離
よ及ぶ、其外生ハ無なきまはよりの中共心ハ無なく府内よ、ちゆへ、生
活すべきやうなく、又故里へ帰りて、盗賊となりて、才
命を付きて、外なくなく、郡県困窮せしを、父兄親族著
してわらハ、そきまらわと、恥辱せらるきとのこの格別
わくハ、其外ハ多く、府内よりそくを振とても、うれなきハ故里
へ帰りとく、外のよりを、わるよ眼前極刑よ陥るを、人なのうち

外をすべく悪事をくくとまるあるまし、又諸国よりも
追放せらるく流浪するこのも、郡県振ひ、去るくよりきて
あるるハもあるるくそ、そきを、なるよ、彼方ハ悪業
とくく、府内よ集まるくハ、さきハ那県ゆたるよりも
内よ、盗賊やこうくあるくハ、欲、そきを兵用ハ
華奢をするハ、俗よハ、貴族厚禄の家よるを、そうハ時
わくるよるまくく、下人を抱るよ、今極のそきを男の異形
よ、化るをそくるよなんわるよ、下ハ、僅厚なる者よ
さやうするハなく、よりて世よ溢きるを、宅内の側歴よ
わたまるなく、酒楼、そくを醉外なくハ、夫婦を

なるもの多し又其最悪性なる物は貨を貪ぬすむ盜賊の輩
なりて人の宅を火をはなつもあり夜きて
偽を言ふ人多き者の之を得ては
と市の中に共流弊を抑へ市朝の奢侈を抑へ郡縣の困窮
を賑さしむるなり
天下財寶
ますます有て太平而多ひ及ぶべからざる奢侈風俗を今
奢侈と招く候事を崇んとなるは賞候廉直の士を撰んで官に
当むるわ号令科條の及べきまわ次第五倫の人らざるや
以身教者從以言教者訟官長為の人は官に畏慎て

の法令のうち為ふ官長の下令法令を服せざる法令屬下まもるべきなるべく
治まるべし下僚官長その人なるべきはなるべきこと
改令法令を厠へうしとなくやうに法令なるべきは法
虛しく行なはるべき孔子も為政在人其人存則政挙其人亡則
政息との多くの筋著ある故人式家を含て二典の文を論せう
厲教のまるに及べ筋のまるを歩歴の法始て虞書を見るべし
後世を除へ教へまるべく粧なるべし
なの代義和の命を為候せ
やさハしくうしに天ハ運動の地なるべ軍動の人をもて候せ

きくもたぶきちりの包微なるをそこに賜ぶて一定の地なる番はよろこゆる神くの人の自力をとらく審にせきるに聖人教天地人の
おのおのこの氏風に従ひて移してなく感服しき天度八萬古
不易なく遅速盈縮常なる地なるもそれさく勤物なるに定
法の及ぶさるおのるそこに況や人人変動常なく乾坤
及ぶ偽紛ひ、法一定はとてあきらかなるおのなる
材八取ぶ釜とも畜夫は利に張釈之ちきを黜ぶ賊八罪を
負ぶきも掾吏の自首八呉祐ちきを責ぶ麗を放ぶきもて
託図の仁をとぶ卯と盗ちとる干城の将をすてぶ孫弘う布
被八倹に似く矯情ぶ姦をきらく郭子儀の大若欲八奏に似

て汚行ぶ譏を貽さぶ一定ぶ格に泥んで萬変ぶ
を制せんとなるはいをゆる柱に膠きく琴を鼓し舟に刻く
剣を求るなるぶいうく変にわひ宜きに八なるべきを去人を
得てはをにゆる神く行くもと八操従進退時にとるる
にあるて変通する狂に法を用てはにあるきに法を帰
ては華に法せるきぶさやもの人きく官にわるまに任せば
国政なる乱るまくあるんぶも行きき衆も服して四に治
平なるしぶ天下ぶ宝なるに人材に恵るる地わるべき
ぶなる楚八白珩を宝とせ臣て賢を宝とすべく孫国い
ひしまま楚語に人人あぶ梁惠王吾国に径寸の珠あるく

車ぬ後十二乗を照さとく齊の威を後ら奏ハ威を
寒人四臣あるてゝ里を照をけて十二乗のことなれ
ちゝ惠をも情る色あるてゝ
ちてゝ感ゝなるハ
東照宮ハ所まなく　ある時一役人閣ゑまおゝ
老臣ゝ代ゝ作ゝ
なるなゝ弱ゝ其人ゝ
ハゝ人物ゝ存知ゝ
ゝて麾下の多き諸士ゝ
誤なの又ゝ法士の若悪を必ゝ
職ゝ

向てちゝぬゝ
き中ゝ用ゝ
ゝ第一
ゝ職ゝ
ゝ存知ゝ
ゝ職ゝ
ゝ
ゝ

奥の類より名物埋もれあるとかく小なりとかこつもいてこれ
より思ひたんと思ふ人ども多くいにしへの名地なりもわれ国家の用
より次なくてもまたねとのなまらず寶の中に寶と云ふ人々
人よりもたれなりとかいふ人は常にくせのやうよりくせ中
なりきとしそれをとりあのまゝ有てこれかきくつろ唯今
のやうなる過去をはすりあらのこさて汝等うのとく出入まる
ものをとこ立ものをとおもくに佐古れんあてわしくなる
て拵家ようしに流よりとりくせんさるき人麿下の士恥をあ
義をたちに人国家の元氣なりそまるよ諸士のんきくいなく
なるとくく恥をたちに臭と曲とくくも臭さくいてなんとうて

やくになるとゆきなのれなのかまをすると為偷ありて義を
ちらんなるうに考うにはくの元氣をせくく死するくく
国家の元氣養へくやうて敗亡よ動て経のうへきよあくに心
為度法なるちうよんをそ宝くくたのまなく見恨くくしとと
作わるはれくくれ藉よりは作よりくく考るよ人材とを寶
とくくにはこれ維を国の元氣と志ってのまに人よ国家の急務
宗廟の基なるるくく家郷の人とよきのよりれ国郡よ似た
るもきうに古今よすくきよ絶ふりはまとうくく中よ老に
はきうにわしてやこうくよ及くこと周礼よ家宰あと歴
代よ吏部あと常よ卿のとよ指くあるよ人材を撰物成

已の職とて其外閥閲の家も不識の材を保仕て朝廷に
登進むと奉ることなけれ共今の世に至る迄日に
益々若相ともに急勢なる次常に人の賢否を心な
くに選挙の乃わざとなく治国宏詞射言書判の事に
すぐれ吏部名ある人を以て銓衡の職に充て簿書会
計に堪ざるものをば其職を失ひ
代くるに況や外郎に縁を以て君相た
る人に成ることを恥辱とせざるに
この花ある人多きを怪諫動くとの盛意に順さる
者わすれむ以治世に後人材輩出し庶政脩挙し文明

四に風靡して天下泰平の化に浴せざるはなし
東照宮に遺沢に報ずや四海奉仕を尽くさるまじ

風俗は政に田地

主なるに天下国家中に風俗ほど切なるはなし若し
の威は天地なく其為なるは雷のごとく為すべきなれ
ども世俗に大勢に逆ふやうに一世の風俗に勝ること
なる行に號令に従ふ一般なるやうなるもそ
なる風俗に是を正すに如くなし
まして遂に行ふ局面なれ共の
ようなるべくやむをえず風俗を因化なるに政は穀粟に

ことに、あらひ嘉穀の稔をも、地あつ、ひ、わ、しくなる、
あらかつ、ものとく、ものとく、ものとく、風俗そのくれて
ハ行きかつ、穀稔のそこなんをも欲せず、地あつらくすることを
くハかく、政令の行きまんを欲せず、風俗とそのあつまりてハ
かの、ときハ風俗のもとをとく、君臣分よりて、君あつ、分を
おさめくて、教化をとくすべ、君の分お
さまらんをこそ、あるべかのおと用ゐるすべきものとも、古のし
若過ぎとよ、くしく、ぬきて、世に風俗とわかりて、急ハ改まる
ぬあること、中ハ過ぎハ移らハ、ぬきかるまハ、今
風俗をなとかなるハ、ハ、ものわしきのこと、好のぬやしをなきて

もはよあるに、ものと風俗を維持すとうまるとも、風俗と維持を
ものまとも、君一人の力ものくるを及ぶ、時に執権とくしやと
ぶ、官長をして、諸下のよるべ、各君臣をこれ、ものく
分をあらハ行を慎ぶ、人のもの手やするやうよるよわ、ハ、
下ものの人、あのたくうに、ものまとわ、恥ものわ、て
今もまく、ものき行ハ風俗をなとなるとは、今世代
ものもの倹ものふ、ものおはあり、毛ハ、ものの業、ものきまし
天下のものるものまとものまとも、ものの、ものの、ものの、ものの
ものの聲、ものをものけらき、ものの、ものの、ものの、ものの
ものの、ものの、ものの、ものの、ものの、ものの、ものの、ものの

上の御盛德ハ翁ハ常に作きすう
まかりまいりまいらせ歴しゝ諸役人として為
ゝこの頃有とうけたまはり人おあるべきさとして君徳ハ
ゝ為とも人ゝ無くなりて多ハ俗なるべき

て神さすまいきまわく作る。某さの下位等を鶴とすきゆへハ。
こやさやうにきこゆれ人と、はけ〳〵ハ。何度とゆゑ人と勢すき我
やゆ作ら人と、くまこハ。かの夜警もまあ〳〵〳〵そ〳〵ハ。の我
家多ら者ハ。やゆ作ら〳〵。人の志とく多間〳〵作ら知ら。しらひ
くもさてわらくきと上の御為と忘ぬよ。てうよ初の事者。
世の風俗も移ら。ハ。権威ハ。なれ世ハ。の事ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。

ゝ手のまゝ、又ゝ悪事を捜抉ゝ、下流の流弊
後ゝ、ゝ、ゝ、今此盗の賊民ゝ、同ゝ府廳へ
寄ゝ、ゝ、ゝ、

山根ナリテ人ノ心ト見ルベシ。衆目ヨワヨレ行ノ悪ハ者ヲ見ル。
あとひ其人国家の法を枉ゆるとすまゝなくともすこやかなるの
ゑ者は監司告ちとられやうゝ其場中く贪婪の上官
科なるハ尚有ます為ハ言科なるハ拷小獄もいくらせ。並て
贪婪の弊と委ねる奥所ハ。其人を義せく府廳ヨ遣し
て。聽ゑの處決を作くるハ吉ハ府下の人家なるよる
ゆくも官ヨ達するヨ府廳より方なく府廳も小廳の成
獄と更く聽乃せハ日く應對簡易ハて下ヨを新るるも。
壅滯ヨれの患なるるくし。そもの〻なるハ下の悪黨郷
曲のるヨ隠るくきやうなく人〻庸行ヨ行ひ行ふ者く

急ヨ感服するまもなくとも。面革ヨハ動まなんてゆして
時月を経なば。風俗も漸く改まぬへし。為官ヨある人ハ
たゞまを生るあり。姑息を安んし。其下を治るヨ法をさく犯
さはゆ是ゆ〻きゝの。ゆそをよゝとんそ是あくハ風
俗の改まれ免き弊。しなるへし。そ〻一世の科箭ヨ
く〻。ち〻。風俗ヨ貪議ヨ。迂遠なのれやうヨ用ゆまとゆ。無
為ゆ〻為まく。国政を妨ヨ。古風ヨ敗るのもあくちゝ。わ
ゆとおゝく。腐儒迂闊の故態とや〻ちん考ゆ〻なるべし
杞憂天の人ともいふべし